

ひまわりからの メッセージ

101号

2019.12.9.

NPO ひまわりの花内
西濃圏域
発達障がい支援センター
発行人: 中野たみ子

師走を迎えて



令和元年も、あと二十日余りとなりました。

国としては、改元、新天皇即位など大きなできごとがあり、何となくあわただしく過ぎた一年だったような気がします。が、皆さんはどうだったでしょうか。

私は、一月には親友を亡くし、七月には、十六年間家族として過ごしてきた愛犬を亡くしました。大切な存在を亡くすということは、本当に言いようのない寂しさがつきまとうものですが、生を受けた時から別れは必然として訪れるわけですから、もちろん私だけのものではありません。年賀欠礼の葉書の数々にも胸が痛みます。

そんな中、アフガンで活動中の中村哲医師が襲われ、亡くなられたというニュースが飛び込んできました。私と同年令の中村医師は、医師でありながらアフガンの人々の中に溶け込み、現地の人

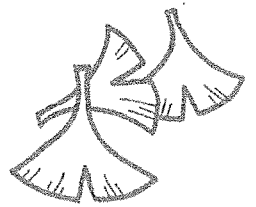
々と共に水路を引き緑地化を進めて、生活を少しでも豊かにと活動して来られたことを聞き知っていましたので、常々すごい方だなあと感じていたのです。でも、その最後は余りにも悲しい結末でした。

私の父は、一人娘の私に「easy-goingはするな」という遺言を残して逝きましたが、中村医師はまさに自分から望んで苦難の道を選び生涯を終えられたのでした。中村医師の衝撃的な死を知って、真っ先に思ったことは「ああ、私は、いつの間にか易い道を歩んでいるのではないか……」ということでした。父が逝って、今年は五十回忌でしたが、泉下の父は今、私のことをどう思っているのでしょうか……。初心にかえらねばと強く思ったことでした。私にもできる事があるでしょうか……。

ところで、先日、神奈川の友人から、みかんが届きました。とても甘くて美味しいみかんでした。その二日後、別の産地のみかんをいただきました。こちらは、まだ酢っぱくて、正月明けに食べる方が甘味が増えて美味しいとのことでした。その時、私は子ども達のことを思い浮かべました。一人として同じ子どもはいないのに、私達は「皆と同じに……」と望むことが多いのではないのでしょうか。子ども達の成長・発達の速さも各々なのに……。私自身の課題の多々も自覚しながらも、子ども達には、あせらずに、一日一日を大切にしながら生きていく力を積み重ねていってほしいと思ったことでした。

支援の大切さと

難しさい……



何年位前だったか忘れてしまいました。子どもたちが通ってきける事業所に「支援」ということが入ってきたとき、ずいぶん異和感がありました。そこに「育つ、育てる」という視点がないと感じたのです。

それから歳月は流れて、支援ということばは一般的になりました。けれども、私は支援の難しさをますます感じていきます。

支援の引き算

赤ちゃんが生まれた時、私達は赤ちゃんの命を守っていくためにその生活の全てを大人の手でやっています。言ってみれば100パーセントの支援です。しかし、赤ちゃんが両手でマグマグを持つようになってきたり、当然自分でできるようになるために、手に握らせてみたり、カップを傾けてみるというような手助けをしていくでしょう。いつまでもお母さんが一さじずつスプーンで飲ませるという行為を続けるいくわけではありません。つまり、大人が手伝える支援の手を少しずつ減らしていくのです。これが支援の引き算です。

でも、保育園でのお母さんの様子や保育士さんの行動、療育の場など「やりすぎ」と思われる場面が本当にくさん見受けられるのです。玄関で靴を正しく置き直しているお母さんや、保育かばんを子どもに持たせることなく持つ歩くお母さん、鼻をかんだ紙を自分でゴミ箱まで捨てに行くお母さんなど、「エッ、自分でやらせて」ということが余りにも多いと思います。そしてそのことを意識されていないのです。

保育士さんや療育スタッフも同様です。製作の時に机上に置いた道具箱が製作のじゃまになりそうだと思うと、そっと机のはしの方に動かしておく、はさみでどこを切ればいいのかわかり指示する、切り終わった紙は、捨てるようにまとめておく、クレヨンは上手に箱に入れられない子に代わって片づける……先生がそばにいてやってくれるのなら子どもたちは、何も考えなくても良いし、こんな楽なことはないわけです。でも、本当にそれが子どもの自立につながるかどうかというと、決してそうではないのです。保育園の加配保育士の役割や療育のサブの役割というものは、もっと考えるべきでしょう。前述のお母さんたち同様に無意識にやってしまったこともあるでしょうから、今一度、手を出す前に「これは今、必要な支援だろうか」と振り返ってみる

必要がありそうです。

子ども自身に気がかせる、子ども自身に考えさせるように仕向けていくこと、そして自分で考えてできたことは、大きな自信になっていくはずで、私達はそのための支援をしているのです。幼い時から「指示待ち症候群」にしないように、みんなで心がけたいものです。

ところが、私がこのように書くのと、支援するのをやめようということになっても困ります。子どもの発達や状況をしっかりとらえていくことが、まず基本であれば、今どうすべきかを考えていくことができますから、どの程度支援が必要なのか、もう一度考えてみて下さるといいでしょう。

発達障害の支援



さて、発達障害ということばが広がり、その特性理解も徐々に広がっているようですが、社会交流のタイプとして次の四つがあることは余り知られていません。

- ① 孤立タイプ……特徴として、孤立、感覚過敏、指示応答性の弱さが見られる。新規場面不安で興奮
- ② 受動タイプ……指示待ち、対処法の弱さ、家で発散。
- ③ 積極タイプ……過度に積極的、多動、衝動的発言
- ④ 形式タイプ……割りきった人関係、語用論的会話など

この四つのタイプに共通して言えることは、社会生活力の獲得が自然にはできないので様々なことに傷つき、自己肯定感が低くなってしまふということです。

特性としての理解がされずに叱責などが続くと、本人に反応行動がおきとききます。小学生で困っている子たちはほとんどが、この反応行動です。反応行動の見極めとしては応用行動分析(ABA)が使われます。

どの様な状況でおきたか、日時、場所、誰に、どんな行動が起きたのか記述をし、その行動への対応と結果も記入しておくのです。そして、それをMAS(行動動機診断スケール)で見極めをしていくのです。

ジャンピングやロッキング、手もパチパチ叩くなどの常同行動や同一性保持(場所、時間、言葉、手順)の決め事(など)感覚への没入(なめる、触るなど)自己への没入(独り言、強制笑い、泣き等)は、気になる行動であつても医療の治療対象ではなく、環境調整をしていくべきであると考えられています。

特性、反応、症状については、過去に講座の中などで再三話しているので触れませんが、本人が安心できる人や環境を保障すること、そして、試してみても良いかなと思うことが広がっていくといいでしょう。ただ本人が提案を受け入れるには、関係性が作られていることが必要ですね。

自己選択 ↓ 自己肯定感へ

子どもたちは、どの子も最初は受け身で、親から言われたことには従おうとします。しかし、そのうちに自分の意思が出はじめ、身近な大人への自己主張を始めます。定型発達でいえば三歳の頃です。

そして、自己主張が通るときと通らないときがあることを知っていきます。発達障害の場合、余りにも自己主張がはげしくて根負けしてしまうこともあり、本人はこうすれば要求が通ることを学んでしまうこともあります。

更に成長すると、周りとの比較や自分の抱いているイメージとのギャップに気がつき、自分ができていないことにも自覚をもつようになります。この頃には、今まで頼っていた支援員さんに対して防衛的になり、指摘されたことに對しても被害的にとらえることが増え、次第に自己肯定感が下がっていきます。指示されることには反抗的になったりすることもあるので、一方的に指示を出さずに、いくつかの「提案」を出して、自己選択ができるように仕向けていきます。しかし子どもに自己選択させるということは、子どもが迷うことです。試行錯誤が始まりますので、周りの大人は、ついついダメ出しをしたくなってしまうのです。だって大人には少

し先のことが見えるので、ついつい口出しをしたくなるのですが、そこはがまんしていくことです。

井川先生の講演の中で、「自己肯定感」を育てる指示について、次のように示されています。

- ・場に合った声の大ききで、唐突に話さない。
 - ・相手が知らないことを説明なしで話さない。
 - ・わかってほしいと思って順序立てて話す。
 - ・どうでも良いことは指示しない。
 - ・必要なことは簡潔明瞭に指示する。
 - ・指示したことは、大人も守る。
 - ・ネガティブなことはポジティブに変換して使う。
- そして、聞き手としては

- ・注意を向けて理解したいと思つて聞く。
 - ・相づち、うなずき、返事、質問などで話に関心をもつ。
 - ・相手の気持ちや表情を讀む。
 - ・具体的イメージがわくように語想起を促す。
 - ・会話のスピードを共有し、共鳴を心がける。
 - ・話してくれたことに感謝のことは忘れられない。
- 大切なことですね!! 忘れずに子育てに生かしていきたいものです。

一月の親の会・二十日 中川ふれあい

センターです。

皆さん、
佳いお手を!!

